
はじめに

本ペーパーが取り上げる高谷好一、桜井由躬雄、そして土屋健治の3名は、かつて東南アジア研究センター（現東南アジア地域研究研究所）教員であり、1980年代を中心に成果を発信し、西欧社会に由来する用語の使用および学問の制度化に抗い続けた。それは1980年代の「センター」の特色でもあった。3名は東南アジアに魅了され一生を捧げたが、三者三様に自らの学問が世に受け入れられない思いを残して世を去った。

本ペーパーの目的は、20世紀後半と言う時代の制約を受けながらも、それを乗り越えようとする彼らの奮闘、より具体的には地域の総合性の希求、独自の用語使用法の追求、そして彼らの奮闘の姿勢を示して何が21世紀に通じる先見性を生んだのかを追求してみたい。筆者は人文学を専門とする。本ペーパーは「作家〇〇とその時代背景」と言った評論的エッセイとお考えいただければ幸いである。使用した主な史資料は彼らの著書のほか彼らや同僚の書いたエッセイ・発言であり、また筆者および知人の当時の記憶を参考として3人の内面に寄り添うように努めた。

以下、彼らの知的活動の前提として東南アジア研究センター創設から1980年代終わりに至る研究環境・時代状況を略述する。

1963年に設立された東南アジア研究センターは、当初から研究機関としての存在意義を問われ続けた。桜井は次のように書く。

センターはその初期に、アメリカのフォード財団の援助を受け、海外の研究事情研究や留学生の派遣を行った。1964年にはアメリカのベトナム関与が本格化し、1965年9月には9.30事件が起こって、インドネシアは一挙にスカルノ反米体制からスハルト親米体制に衣替えした。時代がきな臭い。フォードからの資金供与は当然にも既存のアジア研究者たちの怒りを買ひ、反センター運動が京大を中心に盛り上がった（桜井 2013:46）。

この反センター運動に対して石井は次のように率

直に書いている。

1963年学内のあらゆる反対を押し切り学内措置として東南アジア研究センター設立。65年官制化。官制化されて以後も、学内外のセンター攻撃はやまなかった。むしろ激化の一途をたどった。学生との団交に明け暮れる激動の日々は、1975年、ベトナム戦争が終了するまで丸10年にわたって延々と続いた。（中略）

こうした内外からの政治的攻撃に対する対応策は、研究業績を上げることに尽きると考えたセンターは、publish or perish（出版かしからずんば死か）を旗印に、絶えることなく業績を出し続けていった。

辛く不愉快な日々がとどまることなく続く日々であった。タイ語を学ぶのはスパイ活動のためだろうとか、水田土壌を研究するのは戦車の走行の可能性の調査だろうとか、あるいはらい病の研究は細菌戦の準備のためではないか等々、思い起こしても馬鹿げた中傷に耐えながら、いかなる反対にもめげず、関係者全員が結束して、ひたすら研究を続けてきたことは正しかったと今でも信じている。むしろ、四六時中、自分自身の存在意義を問われ続け、その結果、所員全員の間に緊張感がみなぎっていたことが、かえって研究の質を高める効果をもたらしたのかもしれない（石井 2003:135-136）。

当時、関西にはアカデミズムとしての東南アジア研究は存在せず、研究方法も無ければ、論文のモデルもなかった。センターの研究者たちは新しく未だ定まらない、学問とすらわからない未知の領域へ乗り出した。多くの者が東南アジア地域研究とはフィールド調査を基礎とした学際共同研究によって事実の集積から大きな枠組みを掴みだすことと理解していた（桜井 2013:47）。桜井は書く。

毎日、毎晩、古びた一階の狭く、汚い食堂で、ディシプリンごとの地域理解についての、激論が戦われた。経済学はアンコールワットをこう考え、農学はアユタヤをこう分析し、歴史学は

現在の東南アジアをこう総括する（桜井 2013:52）。

その後、研究の蓄積が順調に積み上げられていき、東南アジア研究センターの研究の第一のピークと言える 1980 年代には、西欧近代とは別の、東南アジアの固有の地域像が追及された。東南アジアの地域像が描けているかどうかを軸に、成果・作品の質が議論された。同時に日本の人々に東南アジアを知ってもらう、東南アジアから得た知見は日本の未来に生かすべきものとされた。しかし彼ら 3 人の「研究」は一般に言われるアカデミズムの枠からはみ出していた。土屋、高谷の専門分野はかなり違うが、第一章と第三章で述べるように、作品を作る方法は意外に似ている。そして二人とも主観、独断が過ぎるとの批判を浴びた。桜井はこの二人の主観と独断を批判したが、本ペーパーで取り上げる桜井の東南アジア史概説もまた同様に歴史研究者から批判された。

彼らの背後には現状への抵抗があったと言える。マルクス主義も含めて、西欧社会を由来とする枠組・用語が外から東南アジア（および日本の）社会・国家に押し付けられる。日本でも東南アジアでも、その枠組・用語に合わない部分は遅れ、非合理とみなされた。20 世紀後半、それがいかに強かったか。近代主義でも日本発のアジア主義でもなく、東南アジアの国家と社会を説明する言葉だけでその間をすり抜けていくことは孤独な作業であった。土屋は『カルティニの風景』のなかで作家ブラムディアとカルティニについて次のように書く。

時代をつきぬけ社会をつきぬけて生きてきた知性が、同じ知性に対してよせる「かなしみ」のまなざしがあるように思える。それは現に生きている社会から決して受け入れられず、拒否されながらも、自分の道をつきすすむものの持つかなしみである（土屋 1991:155）。

また土屋はカルティニに対し「古い時代から脱し新しい世界を求めるために力を尽くし炎を發し、そして燃え尽きて消えていった」（土屋 1991:160）と書くが、2020 年代から見ると土屋、高谷、桜井にもこのような側面があったと思われる。とはいえ、第 1－3 章に見るように土屋、高谷、桜井が自らの内に抱える 20 世紀的思考・思想の制約も大きく、これもまた指摘していかなければならない点である。

21 世紀の第一四半世紀が過ぎた現在、本格的な人口減をむかえた日本と、中国を主とした一次産品需要に対応して輸出産業が伸びる東南アジアとは、い

ずれも 20 世紀とは異なる社会変化を経験している。日本では人口減少・予算減少のためもある歴史研究全体、そして東南アジア地域研究の存在意義が問われている。そのなかで、本ペーパーでは 1980 年代を中心に闘った高谷、土屋、桜井の作品の一部に、2020 年代に日本で注目され始めた問題と同質の問題意識が含まれていたことを示したい。

なお 20 世紀の東南アジア研究センターの歴史については清水展が外側から見た良質な小史を発表している¹。

また河野泰之の東南アジア地域研究研究所退職時のエッセイに示される東南アジア地域研究の捉え方は筆者の考えとよく似ている。河野と筆者はともに修士課程在籍時の 1981 年 7 月に東南アジア研究センター「東南アジアセミナー」に参加して東南アジア研究を開始している²。

1985 年のプラザ合意後の円高によって、東南アジアに直接投資を行う日本企業が増え、東南アジア経済の発展を促すことになった。1982 年以降のラテンアメリカやアフリカの発展途上国は累積債務危機に直面し、世界経済は「世界恐慌」に匹敵する深刻な経済危機に陥ったが、その中で、アジア太平洋地域はこの危機を克服し持続的成長を実現した。世界銀行はこの発展を「東アジアの奇跡」と呼ぶ。この発展はなぜ実現したのかの研究が秋田茂（大阪大学名誉教授）を中心に行われている³。

参考文献

石井米雄. 2003.『道は、ひらけるータイ研究の五〇年ー』めこん.
桜井由躬雄. 2013.『一つの太陽ーオールウエイズー』めこん.
土屋健治. 1991.『カルティニの風景』めこん.

- 1 「東南アジア研究所の過去、現在、そして未来へ」『50 周年記念文誌 21 世紀の東南アジア研究 - 地球社会への発信 -』（<http://www-archive.cseas.kyoto-u.ac.jp/50th-anniversary/preface.html>、閲覧日：2025 年 2 月 18 日）。
- 2 「河野泰之教授 退職記念インタビュー」『CSEAS ニュースレター』81（<https://newsletter.cseas.kyoto-u.ac.jp/nl-81/kono/>、閲覧日：2025 年 2 月 18 日）。
- 3 「エネルギー危機と 1980 年代のアジア国際秩序ーアジア太平洋経済圏の形成を中心に」（基盤研究（A） 課題番号：23H00016）（<https://kaken.nii.ac.jp/ja/grant/KAKENHI-PROJECT-23H00016/>、閲覧日：2025 年 2 月 18 日）。